

大学日语专业高年级教材

にほんご

日语

(第五册)

陈生保

胡国伟 编

陈华浩

上海外语教育出版社

大学日语专业高年级教材

日 语

第五册

上海外国语学院日语系

陈生保

胡国伟 陈华浩

上海外语教育出版社

大学日语专业高年级教材
日 语
第五册
上海外国语大学日语系
陈生保 胡国伟 陈华浩 编

上海外语教育出版社出版
(上海外国语大学内)

上海外国语大学印刷厂印刷
新华书店上海发行所发行

开本 787×1092 1/16 20.5 印张 400 千字

1986年5月第1版 1999年10月第13次印刷

印数: 6 000 册

ISBN 7 - 51009 - 205 - 7

H · 137 定价: 13.70 元

本版图书如有印装质量问题,可向承印(订)厂调换。

前言

随着中日关系日益密切，两国各方面的交流日趋频繁，我国学习日语的人数与日俱增。新中国成立以后，特别是近几年来，虽然已经出版了几种供日语专业低年级使用的教材，然而，高年级的教材却至今不见问世。为了满足社会的需要，我们对在我系已使用过六、七轮的教材作了认真修改，现付印出版。

本教材是大学日语专业的高年级精读课教材，是我系所编日语基础课教材《日语》（一）～（四）册，上海译文出版社出版）的续篇。全套教材共有四册（五～八册），每学期学习一册，供三、四年级使用；同时也可供已具有日语基础的广大自学者作为进一步提高日语水平的教科书。

本教材的编写原则如下：

（一）注意思想性。所选课文和编写的例句、练习，都注意能对学生有一定的启迪和教育作用。当然，这里所说的教育作用，是就广义而言的。它既包括热爱科学、献身祖国、诚实为人、珍惜友谊，也包括热爱自

然、礼貌待人、尊敬师长等等。

（二）注意实用性。我们主要选择反映今日日本的时代题材，尽量做到介绍客观，实事求是；在语言方面，则采用现代的规范语言，不仅要求正确、流畅，而且尽量做到生动、优美，以便使学生能学到地道的日语。

（三）注意实践性。本教材注重培养学生的外语实践能力，希望学生的听、说、写、读、译五种能力全面提高。为此，我们在每课课文之后，都配备了形式多样、内容丰富的练习。

（四）注意文章的趣味性和题材、体裁的多样性。本教材所选文章，内容上尽量做到活泼生动，饶有趣味；题材方面则有中日友好、日本的社会风貌、伦理道德、文化特色、语言文字、人物历史、自然风光等等；体裁方面，除了一般的记叙文之外，还有评论、随笔、抒情散文、游记、小说、诗歌、传记、讲演、剧本、回忆录、科普文章等等。在第七、第八册中，我们还准备选

一些有关论述日本有代表性的几部古典作品的文章，並让学生阅读和欣赏这些古典作品的部分章节。

(五) 注意既符合大学日语专业的要求，也照顾社会广大自学者的需要。为此，我们在生词和注释等方面力求详尽，语法、句型和词语部分所举的例句都附有译文，所有难读汉字的字旁都注了读音。

(六) 叙述文字全部使用日语，目的是为了培养学生用日语思维的能力。个别较难的地方附了汉语，以供参考。

我们希望使用本教材的教师采用「精讲多练」的教学法。本教材比之低年级基础课教材，不仅课文长度增加，而且语言难度和内容深度也有较大的提高，而上课时间则有所减少。为此，我们建议教师在学生充分预习的基础上，进行重点讲解，减少讲课时间，增加课堂练习时间。在练习的形式方面，可以采用问答、讨论、座谈、讲演等多种方式，並注意把口头和笔头、课内和课外有机地结合起来，使学生不仅彻底理解，而且能够熟练地掌握和应用。

我们希望使用本教材的学生不仅仅满足于读懂文

章，而是循着理解——记忆——活用的学习规律，切实地提高听、说、写、读、译的五会能力，最终达到准确而熟练地表达思想的目的。为此，除了与低年级时一样，要重视课文的朗读和背诵之外，更需要养成自学和从事科研的习惯和能力，学会熟练地使用原文辞典和各种日文工具书。

在编写本教材过程中，利用和参考了日本几十家出版社所出的初、高中日语教材、教学资料和图书，同时也利用和参考了所能见到的国内出版的一些书刊杂志。教材的课文和课外读物部分都注明了出处，其他部分所引用的一些语言材料，由于引用的范围很广，涉及的文章、书刊甚多，並大多经过删节或改写，故不一一注明出处。

本教材由上海外国语学院日语系陈生保、胡国伟、陈华浩编写。陈生保担任主编，胡国伟任副主编。编写过程中，曾得到我校院系领导、各位同事以及外语教育出版社的大力支持，同时得到在我系任教的日本籍教师永野隆史、真田谨慈两位先生的热情帮助，在此谨致谢忱。

这部教材的初稿始编于一九七八年秋，自一九七九年二月起在我院日语专业使用，也曾蒙复旦大学、华东师范大学、上海大学、南京大学、杭州大学、四川外国语学院等兄弟院校的日语专业试用。在付印之前，编者根据我校使用的经验，也吸收了有关各方的意见，对原教材作了较大的修改。但由于编者水平有限，本教材的缺点和错误在所难免，敬请读者批评指正。

编者

于一九八四年十二月

根据我校使用的经验，也吸收了有关各方的意见，对原

关于本册教材编辑体例的若干说明

本册教材供大学日语专业三年级上学期使用，共十二课，每课由课文、注释、新词新语、学习指南、语法句型 and 词语、练习、课外读物、附录等八个部分组成。每一课用多少学时，可视学生水平、课文长短和难易程度而定，不必强求一律。以我院日语系为例，平均每一课的上课时间为十学时。

(一) 课文——绝大部分都选用原作。凡出自外语教育需要对原文作过删节的，编者都在课文末尾作了说明。

(二) 注释——对于课文的作者和课文中出现的重要的人物、事件、地名、书刊，以及其他一些不易了解的事物，均作简要的注释。

(三) 新词新语——编者从读音、词义、用法、搭配等角度判断，认为是新出现的词语（也有个别语法规则），都列入本项。各条词语都有日文解说和汉译，个别形式与中文完全相同的词语，则略去解说和汉译。

(四) 学习指南——为了促使学生深入地理解课文，

并培养他们独立思考的能力，编者就课文中较难的地方，作启发性的提示或伏笔性的提问。

(五) 语法句型和词语——编者从课文中出现的新的语法、句型、词语中，选出值得举一反三，重点学习的条目，按出现的次序排列，并对它们的接续法、呼应关系以及使用方法逐一进行说明。每条都附三至五个例句。所有的例句均附译文，以便于读者自学。

(六) 练习——练习共有九种形式，可分为三大类：汉字写假名、假名写汉字以及造句，属于基础性练习；词语整理、问答以及改写、缩写，属于活用性练习；日译中、中译日和实力测试，属于综合性练习。

练习部分用口头还是用笔头来做，可由教师按具体情况决定。只是其中的问答部分，最好用口头进行。

练习部分第九项的实力测试，采用了日本学校常用的试题方式。这是为了从多种角度进行训练，以提高学生的日语能力，同时也考虑到去日本学习的人越来越

多，以便使大家习惯这种考试形式。

(七) 课外读物——尽量选择与课文有联系的文章，

这是为了在语言上起到复习、巩固和扩展的作用；在内容上对课文有所补充。编者只对个别难读的汉字注了音，

加了少量的注。

(八) 附录——由词语之窗和语言研究室两部分组

成。词语之窗列入了若干读音复杂、搭配丰富的词，这

是为了给在学习上尚有余力的学生提供一些语言素材。

这些列入的词，都只是罗列了一些与之有关联的常用词语，部分较难的词语附了译文。

语言研究室提供了有关日语语法、词法等的基本知识，旨在起到归纳和整理的作用。

目次

第一課 めくらになった名僧……………1

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「も」

「……を前にして」

「ひきかえに」

「つくす(尽くす)」

「……ように」と「……ようにと」

「運ぶ」

「意気地がない」

「しまつ」

「どこまでも」

「杖とも柱ともたのむ」

「思い立つ」

「……ことなく」

練習

課外読物 鑑真和上、大和朝廷、遣唐使と遣隋使

付 録

1 ことばの窓 無 聖 氣 訪

2 ことばの研究室——漢字の成り立ちと音訓

第二課 命をかけて……………23

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「備える」

「……じゅう」

「なんて」

「思いもよらない」

「……ようにする」

「……おき」

「束の間」

「から」

「……ようがない」

「ことはない」

「……伝い」

「あえぎあえぎ」

練習

課外読物 芙蓉の人(抜粋)

付録

- 1 ことばの窓 足 ——が(を)する 日
- 2 ことばの研究室——語句の構成

第三課 フシダカバチの秘密……………47

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

- 『そっくり』
- 「……くらいだ」
- 「今にも」
- 「……ほい」
- 「に」
- 「……(を)せられる」
- 「……あげく」
- 「……ずにはいられない」
- 「仕向ける」
- 「……ぎわ」
- 「なんでもない」
- 「……そうにない」

「それこそ」

練習

課外読物 かも卵

付録

- 1 ことばの窓 手 物 虫 気 腹
- 2 ことばの研究室——指示語とそのはたらき

第四課 時候のあいさつ……………73

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

- 「……ては」
- 「(～)は(～)で」
- 「……ことになる」
- 「ぐあい」
- 「……ようになる」
- 「……ことは……ても」
- 「……かのようにだ」
- 「か」
- 「……ようでは……ない」
- 「……ものだ」
- 「……よう(様)」
- 「……を無にする」「……が無になる」

練習

課外読物 緑と青の自然

付録

1 ことばの窓 雨 問

2 ことばの研究室——副詞のはたらき

第五課 家族旅行

.....94

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「……きる」

「……どうし(同士)」

「そうもない」

「羽目(はめ)」

「……う(よう)と……まじと」

「……にする」

「……そも」

「あたり(辺り)」

「……通(し)どうし」

「……持て余す」

「……ぎみ」

「……たしてみれば」

「……たとして」

「思い切る」

練習

課外読物 九州地方のあらまし

付録

1 ことばの窓 化 宮 色 面 雑

2 ことばの研究室——類義語と対義語

第六課 沈黙の世界

.....120

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「……とく」

「とりわけ」

「……あたかも」

「……へく」

「……のでは」

「……おしなべて」

「……どうか」

「……ひよっと」

「……かと言えは」

「……う(よう)と……う(よう)と」

「……以外」

「……早い話」

「……にこしたことはない」

練習

課外読物 ぼくのじいちゃん

付録

1 ことばの窓 押し 声 身

2 ことばの研究室——慣用句のいろいろ

第七課 藤野先生

142

注釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「ひとつ」

「……とある」

「なり」

「……たしろ」

「すら」

「現代」

「いっこう……ない」

「……すに済む」

「……はしない」

「例」

「……ととしても」

「折」

「……につれて」

練習

課外読物 魯迅の印象

付録

1 ことばの窓 頭 屋 顔 床

2 ことばの研究室——文の成分

第八課 日本語の特質

173

注釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「あらためて」

「馳走」

「断る」

「……となると……」

「やる」

「……より……ほうがいい」

「結構」

「……(た)ところが……」

「……ようになっている」

「……といえはるですが、……」

「見当がつく」

「この上もなら」

練習

課外読物 日本語と勤

付録

- 1 ことばの窓 解 空 行 正
- 2 ことばの研究室——文の成分の位置と省略

第九課 おけらの水渡り……………202

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「思い出したようだ」

「愛嬌」

「ものになる」

「よくよく」

「……となく」

「……がたい」

「……かける」

「向き」

「苦もなしに」

練習

課外読物 日本人の知的創造性について

付録

- 1 ことばの窓 羽根 石 苦 芋 納

2 ことばの研究室——文の長さと分かりやすさ

第十課 幸 福……………226

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「たって」

「大して……ない」

「くせに」

「とたん(に)」

「……ごし」

「くさい」

「……が早いか……」

「……やがる」

「……がけた」

「だの」

「たら」

練習

課外読物 最後の授業

付録

- 1 ことばの窓 肩 腰 重
- 2 ことばの研究室——意味のうえからみた文の連接関係

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「……ぱり」

「山と積む」

「原因は……から来ている」

「……立てる」

「かな」

「ぞ」

「どうか」

「思い」

「身に余る」

「それは」

「いてもたってもいられない」

「つまり」

「いままでの」

「やう」

「気をおとす」

練 習

課外読物 ラジウムの発見者

付 録

1 ことばの窓 口 戸 老 素

2 ことばの研究室——文の順序を考える

注 釈

新しいことば

学習の手引

ことばの学習

「……かれ……かれ」

「……としたら……」

「……からには……」

「實(たち)」

「馬鹿」

「かたまり」

「このかた」

「要するに」

「AならA」

「……から……にかけて」

「途方もない」

「……ならでは……ない」

練 習

課外読物 カルカッタの「街路族」

付 録

1 ことばの窓 大 小 食

2 ことばの研究室——文末表現

第一課 めくらになった名僧

八世紀もなかばごろのことです。

奈良の都は、毎日、たいへんなさわぎでした。東大寺という大きな寺の大仏が、やっとできあがったからです。「大仏開眼」といって、大仏が完成したことを祝う儀式が行われるのも、もう間近いことでしょう。

ところで、このお祝いを前にして、聖武天皇は、心の中で、ひとりの人を待っていました。

「こんどの式に間に合えばよいが……。」

もう何年も前から、待ちわびている人があったのです。しかし、どういうわけか、その人をむかえに行った使者からのたよりは絶えて、すでに何年にもなりません。

「いったい、来てくれるのだろうか、だめなのだろうか。来てくれるならば、この晴れの日にぜひ、間に合ってもらいたい。」

聖武天皇は、そのことばかりを考えていました。いったいだれを、そんなに待ちわびていたのでしょうか。

話は十年ばかり前にさかのぼります。

そのころ、日本には、中国から、おおぜいの僧が渡ってきていました。また、これとひきかえに、日本からも、毎年何人か

の留学僧が、海を渡って中国へ出かけて行きました。

「中国から、すぐれたお坊さんを、ひとりつれてきてもらいたい。」

ある年、ふたりの留学僧が、聖武天皇からこうたのめられました。というのは、そのころの日本には、戒を授けることのできる僧がいませんでした。天皇はそれのできるえらい人がほしかったのでした。

戒というのは、仏教で、僧たちが守らなければならない規律のことです。僧たちの間では、やっではいけないことがいくつかきめられてあって、それを守ることができなければ、一人前の僧にはなれません。そして、その規律を守ることができるようになったとき戒を受けます。

日本でも、仏教がさかんになって、戒を受けることができず、僧はたくさんいました。しかし、戒を授ける資格をもった僧は、ひとりもいなかったのです。

中国へ渡ったふたりの僧は、唐の揚州という所に鑑真という、すぐれた僧のいることを聞きました。この人に来てもらえたら、というので、はるばるたずねて行きました。そして、こぼをつくして、どうか日本へ来てくださるようにと、たのん

だのでした。

鑑真は、子どものときから、熱心な仏教の信仰をもち、十八歳のころには、もう一人前のすぐれた僧になっていました。かれは海の向こうの日本から、ふたりの僧がわざわざ自分を招きに来た、その熱心さに心を打たれました。そして、遠い見知らぬ日本の国へ渡る決心をしました。

鑑真は、そのころすでに五十歳をこえていました。かれが行くことになったので、何人かの弟子たちも、いっしょに行くことになりました。一同は、さっそく、その準備にとりかかりました。あくる年には船を出すことになりました。

しかし、この旅行は、そう簡単には、はこびませんでした。せっかく海に出た船は、大しけにあって、難破してしまいました。やっと助けられて、命からがら陸にあがると、次の出発まで、また船を用意したり、いろいろの準備に手間どりました。

やがて準備ができて海に出ると、こんどは海賊におそわれました。だいいじな物を取られたりして、また、むなしく、もどらなければなりません。そればかりでなく、鑑真の渡航をねたんで、いろいろのじゃまをする人たちもありました。

一行のうちには、たび重なる失敗に、すっかりいくじがなくなつて、こんなばかげた旅をするのはやめようじゃないか、などという者も出てくるしまつてした。苦しいことが続くので、つい仲間われをして、けんかが始まつたり、自分だけ、得をしようにとする人が出てきたりしました。

そんなときにも、鑑真は、いつもだまつて、ひとりでもがまんをしているのでした。どんなときでも、その顔からは微笑が消えません。人々は、その微笑を見ると心をはげまされ、また、旅を続けようという、勇気がわいてくるのでした。

こうして、何度か失敗が重なりました。

悪い時には悪いもので、そのうち、日本からむかえにきた僧のひとり病氣にかかり、とうとう、旅の空で死んでゆきました。だいいじな人に死なれて、鑑真がすっかり力を落としてさびしくしているとき、こんどは、この人のあとを追うように、一番弟子がなくなりました。

つえとも柱ともたのむふたりの死は、鑑真にとっては、大きな痛手でした。年をとっていることではあるし、重なる苦勞に、鑑真のからだも、だんだん弱くなっていくのでした。大きな不幸が鑑真にもおとずれたのは、このころでした。

ある日、弟子のひとりは、鑑真が手さぐりで、何かごそごそやっているのを見て、びっくりしました。目が見えないのでした。長い間のつかれが、とうとう、この年とつた僧を失明させてしまったのです。

鑑真は、それでも微笑をわすれませんでした。そして、どこまでも、日本へ行く志を捨てませんでした。これから日本へ行って、自分のする仕事を考えるとき、鑑真の心は、ほのおのように燃え、光を失った目は、明るくかがやくように思われるのでした。

五回の旅の失敗ののち、六回めに、鑑真は、とうとう日本に着くことができず。ちょうど、日本へ帰ることになっていた遣唐使の船に乗って、九州に着いて、無事に奈良の都へ来る事ができたのです。この旅を思い立ってから、実に十一年めでした。

唐の国でも名の聞こえていた鑑真が来たというので、奈良では、聖武天皇はじめ、たくさんの僧たちは、ひじょうに喜びました。あの大仏開眼からは、すでに二年の月日がたっていました。めくらになってもその苦しさをがまんして、はるばる海を渡って来たこの名僧を、人々はていちょうにもてなしました。

あくる年、東大寺の前で、天皇をはじめ、五〇〇人にあまる僧たちが、めくらの鑑真から初めて戒を受けました。鑑真が戒を受けた所は、戒壇院といって、今も東大寺の中に残っています。

鑑真は、その後、広い土地を朝廷からもらって、りっぱな寺

注 釈

一、奈良(なら)

近畿地方の中南部にある内陸県、昔の大和国。県庁所在地は奈良市。奈良市は人口が約三十万で、古くは「平城京」と呼ばれ、いまは国際文化観光都市である。

を建てました。そして、多くの人々を教え導きました。ふたたび、故郷の唐へ帰ることもなく、十年ほどたつてから、その寺で一生を終わりました。七十七歳だったと言われています。この寺が、いまも奈良の南にある唐招提寺です。

若葉わかばして御目おんめの竿しぎぬぐはばや 芭蕉

唐招提寺に残されている鑑真の像を見て、江戸時代の俳人芭蕉が作った句です。「かがやかしい新緑のやわらかい若葉で、めくらになった鑑真の目にたたえられたなみだを、ぬぐってあげたいものだ。ああ、どんなにつらい目にあわれたことだろうか。」

という気持をよんだものです。鑑真の像は、天平期の傑作と伝えられています。気品の高い名僧のおもかげが、今でも、あおぎ見る人の心を打ちます。

(日本文化庁編「外国人のための日本語読本」による。一部削添)

二、東大寺(とうだいじ)

奈良市にあるお寺。聖武天皇の命で奈良の大仏が造営され、七四三年、当時の日本の名僧良弁らうべんが創建した。二度兵火で被災した。現在の大仏殿は江戸時代に建てられたもので、現存する日本最大の木造